

SIX The Harvest of Mars

The Casualties of War

021120 田尻義了

p83-1

- ・人類学者 未開の戦争についての研究 近年まで直接的な効果・影響に考察していない
ソビエトの計画主義者 サイズと効率の問題
効率はあくまで割合であり、絶対量ではない
- ・課題・問題 どれほどの効果が未開社会の戦争において敵を死に至らしめ、破壊し、勝利からいかほどの益をとるのかという点

PRISONERS AND CAPTIVES

p83-2

- ・無国家社会において、成人男性を降伏や捕虜にする例はまれである
敵の手に落ちた男はすぐに殺害される
事例：ニューギニア高地 Mae Enga
相手が矢や槍で負傷すると、敵は斧で襲ってくる 味方は傷ついた仲間が殺されないように後方へ送る
戦士は一斉攻撃するために傷つき弱った振りをする
- ・武装していようと、非武装であろうと未開社会の多くでは、ためらい無く成人男性を殺す
降伏は捕虜という考え方がないので実質的な選択肢ではない

p84-1

- ・捕虜がないという考え方の理由はそもそも伝統・習慣であった
事例：1879年 Anglo-Zulu
英軍の将校が Zulu の捕虜に対して「いつも捕まった英軍は殺されるのに、なぜおまえ達を殺さないのか」と質問 捕虜の1人「殺するのが黒人の習慣で、白人ではない」
- ・捕虜の交換規定の中に、未開の戦争において捕虜をとらない普遍的な理由について考察できる
理由は敵が暴力や報復を捕虜に行うという恐れ 警戒監視が必要 実際はできない

P84-2

- ・2,3の文化では、常に男性を神に対する犠牲として、捕虜にし拷問する
事例：北東部のイロクォイ族 コロンブス以前
捕虜の戦士は戦闘集団が戻るまで、予備的拷問を受ける 戻ってくると、捕虜は鞭で打たれる 鞭を耐えた戦士は最近の戦争で男性を失った家族に与えられる 儀式的に死んだ家族のメンバーの名前が与えられ、きつい拷問を受ける 出来るだけ拷問に耐えるように期待される 死んだ時、体の一部(心臓は常)を食べる
- ・同様な事例：南アメリカの Tupi 族
拷問を受けたものを子供らが弓や斧で殺す 犠牲者の血に手を浸すことが戦士への義務
- ・宗教的拷問・犠牲・食人のために男性を捕虜にする例
マオリ・ポリネシアの Marquesans・Fijians・北アメリカの数部族・南アメリカの数集団
ニューギニアの数集団

- ・少数の首長や名声のある人に捕まった場合のみ、儀式が行われる
- ・多くの捕虜は特別な儀式なしに殺される
- ・きまぐれに儀式が延期されたり、遅らされたりする

p85-1

- ・いくつかの社会では敵に血縁者や義理の親族関係にあるものがある場合、戦闘を避けようとする
- ・ニューギニア高地 敵に親族がいる場合
戦線を変えたり、(敵側の)仲間に親族のことを頼むために教える
助けるためでなく、自分の手を下すことを避けるために目標を教える

p85-2

- ・東アフリカの部族
捕虜の代価が牛であることが一般的なので、降伏という行為が解される
ケニアの Meru 降伏する戦士 槍を頭上に挙げ「take cattle」と叫ぶ
相手が敵討ちしようとして殺すのなら、この条件付きの受け入れは意味なく終わる
- ・成人男性を捕まえ、集団に組み込むという習慣は極めて稀
アメリカの Shawnee や Fox の部族 生き残った男性捕虜を助ける 集落へ戻る間に拷問
戦争での代理人を必要とする家族が請求する
南アメリカの小さな首長制 若い男を捕虜 娘らと結婚 奴隷クラスとして組み込む
スーダン Nuer 敵(Dinka)から少年を捕まえ、養子にする 娘・少女は非公式に組み込む
捕まった年寄りの女性や赤ん坊は殺され、小屋で燃やされる
成人男性はただ殺される
- ・奴隷として戦争捕虜を使い、売買する集団は女性や子供を征服し、全ての成人男性を殺す
- ・一般的に未開の戦争で生き残るには3つの方法がある 休戦・勝利・敗北時の足の速さ

p85-3

- ・未開社会では、女性が敵の兵士によって傷つけられたり、捕まえられたることを免れる場合が存在
- ・小規模な急襲で女性が殺される社会でも、傷つけられることから免れることがある
ニューギニアの Kapauku 結婚した女性は一度撃った矢を回収し、夫に手渡すために戦場を自由に動き回る

未婚の少女は敵に捕まるとレイプされるので用心深くする

サハラ Tuareg 族 野営地の近くで戦闘に負けると、敵の中に女性や子供を残したまま逃げ出す

こうした行為は Tuareg 族の習慣に基づく見込みを反映
(戦いで女性や子供には危害を加えないというもの)

- ・こうした女性や子供に対する騎士道的な行為は無国家社会の集団では稀である

p86-1

- ・女性の捕獲が多く戦士にとって勝利の見返りであった
- ・多くの社会では男性が負けると、女性は捕まえられ社会に組み込まれる
- ・西北アメリカの多くのインディアンが女性を捕獲するために戦う
捕獲された女性の地位は奴隷～第2婦人まで様々である

女性の捕虜は解放され、逃げることも出来る

p86-2

- ・捕獲された女性の数は女性の人口の割合を示す

カリブ諸島の Lesser Antilles 14 世紀 伝承

Arawak の女性を妻にするため男性を皆殺しにして征服 2・3 世代後、女性と子供はお互いに Arawak を話す、征服した男性はカリブの変化した言葉を使う

特殊な状況

- ・男性の大部分が失われることは人口統計に直接影響を与えないが、女性のロスはその集団の人口の衰退に大きな影響を与える

p86-3

- ・女性の捕獲は非常に価値のあるものでもある

多くの社会では女性労働は主要食料の大部分を占める

カリフォルニア ドングリ採集

太平洋北西海岸 鮭の捕獲と乾燥 女性の専門化

メラネシア 採集・ブタの飼育

- ・複数の女性を手元に置くこと 経済的な効果がある 一夫多妻制
婚資や妨害する姻戚がいないのであれば、多くの女性獲得する

p87-1

- ・多くの部族社会では、性別や年齢に関わらず捕虜をとらない

南西部の Chemehuevi やカリフォルニアの数部族 誰も助けない

捕虜の取り扱い

ポリネシア 裁量として与えられる

タヒチ 敵の子供を母親と一緒に槍で突き刺し、頭に穴を開けたり、そこに紐を通す

マオリ 戦士が女性を殺したりすることを禁じている

- ・捕虜をとる社会でも、殺戮がはじまると止めることは難しい

ニューギニア Asmat の首長間の争い 誰も女性や子供を守ることに興味はあるが、止められない

捕虜はほとんど殺されてしまう

p87-2

- ・一般的に無国家社会では、何か物理的な利益がある場合のみ捕虜を生かす

この場合は女性や子供が助けられるのに限られる

- ・逆に、国家では、負けた敵の成人男性の生命を守ることに強い関心がある

捕虜は税や貢納品を納め、農奴や奴隷になる

国家は降伏した敵から経済的に利益を得る

- ・文明化された戦闘で起こる暴挙は司令官が自分の兵士を管理できないときに起こる

p87-3

1904 年 南西アフリカ Herero-Nama の反乱

ドイツ政府の対応 私欲による慈悲やそうした状況に陥ったいい事例

地元の軍事司令官 Von Trotha が Herero に対し虐殺をしようとした 帝国の首相・ドイツ植民地事務所は皇帝に命令の撤回を要求「残虐行為で公的關係としても悪く、地元の労働

力がなくなることは植民地の発展にとっても良くない」しかし、政府・軍・植民地では皇帝の命令を無視 数年間の戦いの後、Nama の 1/2 と Herero の 1/6 が生き残る

問題は正規軍よりも agent(代理人・政府職員)によって地元民の大虐殺が行われた

・Sand Creek や Camp Grant などの北アメリカのインディアンの悪名高い大虐殺やヨーロッパ人の征服中の大虐殺は在地の軍で行われた

p88-1

・「戦争の規則」、文化的予測、部族や国家の忠心だけが、正当な戦争と残虐行為を分けることができる

Caesar の Bourges での Bituriges の殲滅

1862 年の Sioux によるミネソタでの殺人

Wounded knee や My Lai での米軍による大虐殺

Dresden や広島での空爆

日本軍による南京やマニラでの大虐殺

同様な行為が未開社会でも古くから記述されている

・大虐殺を擁護する人は常に行為者らは怒らされていたのだと主張する

しかし、戦争はいつも怒りに満ちあふれている

無国家の集団による捕虜の扱いは常に残虐である

WAR DEATHS

p88-2

・近代国家の市民は自分達が行う行為全てが、未開社会や古代の行為と一致するものではなく、有効で効果的なものであると考えがちである

近代文明は酷い・害があるとルソー派の人々は言う

実際、未開社会の戦争での負傷者数の割合が近代国家の戦争での負傷者数の割合を上まわっていることを示すとショックを受ける

p88-3

・実際の未開社会における戦争の数値はほとんどなく、ここ数十年で民族学者が集めている

図 6.1 近代国家の損耗人員の割合を比較したもの

戦争での致死率は毎年平均人口の割合を示している

図 6.2 戦争に関連した全ての人間の割合

・未開社会での戦争の方が近代よりも多く死んでいる

・近代国家の死亡率は戦争による病気などで死亡した人員を含めており、過大評価している

事例 Civil War 英軍が出した死亡者の 2/3 は病気である

未開社会のデータにはそれらの数値は入っていない

・近代国家での死亡者には馬や輸送手段や武器などでの偶然の事故・出来事を含んでいる

事例 Crimean War 約 20% ボーア戦争 約 14% が偶然の事故

未開集団の死に関する記録は戦闘中に受けた直接的なもの

図 6.1 はそうした直接の戦闘以外での死を近代国家の数値からは抜いている

p89-1

・戦争による分裂や混乱の結果、病気や餓死による市民の死はどうか？

そうした死は未開社会では含まれないが、市民の死として含める
近代国家では数値の計算が難しく、未開社会ではデータがない
未開社会にもそうした市民に相当する人々の死はある

事例 ニューギニア Mae Enga

p91-1

- ・高い損耗率は部族民と西洋人との接触の結果であるという意見もある
筆者の初めての発掘 カリフォルニア サンフランシスコ湾
先史時代(1000年前)の集落
黒曜石製鏃が食い込んだ人骨・頭蓋のない人骨 「悪い光景」
中央カリフォルニアの先史時代の人骨の約5%に鏃が食い込んでいる
戦争の明確な証拠
実際の暴力で死亡した人間はもっと多いであろう
こうした先史時代の場合暴力による死者数を過小評価している(鏃の出土を数えている)
Gebel Sahaba の墓地では矢の傷があった人骨の25%に鏃が食い込んでいた
図 6.2 カリフォルニアやスカンジナビアの戦争による死者はおそらく7~40%
- ・また、部族民の暴力は西洋人との接触後増加したという意見もある
事例 British Columbia の海岸部
外傷を示す人骨 先史時代 20~32% ヨーロッパとの接触後(1774~1874) 13%
- ・民族学者が提示した数値は考古学の立場から明らかに出来た
- ・部族民が戦争するのに西洋人からの指示や誘導はなかった

P91-2

- ・一般的な高い致死率と未開社会で確認された一回の戦闘での低い損耗率はどう折り合いがつくのか?
未開社会の戦士の高い出撃率 未開社会の方が頻繁に争いが起こる
低い損耗率の争いが蓄積される
事例 100人の戦士のいる部族 5%が損耗したことで一つの戦いが終わる
年4回そうした戦いが起こる場合 5年間で64%損耗 36人が生き残る
5年後には戦う力を失う
- ・致命傷に至らない傷を受けた時点で、小さな社会では戦いを終わらせる
彼らは個人が生き残ることではなく、集団が生き残ることである

P92-1

- ・損耗人員の数や性質を制限することが戦いのコンテキストでおこなわれる
急襲や待ち伏せのような発生が頻繁で、無差別に死を与えるものは制限できない
未開社会での大規模な争いは多くの損耗人員を出す 未開社会での高い致死率に至る

P92-2

- ・降服者を受け入れず、男性の捕虜を全て殺すという行為が戦争での致死率に含まれている
本来、戦いの熱気の中で投降者を受け入れるのは難しい 近代国家の兵士は期待する
敵の手に落ちた負傷兵は、最低限の手当を受けるか、敵の負担にならないように殺される

P92-3

- ・女性の死亡率は近代国家の戦争での明確な協定がない場合でも、部族間の争いでの負傷者

数を越えない

連合国のドイツに対する戦略爆弾は男性より多くの女性を殺した
しかし、ドイツの男性の損耗率と比較すると、女性1人に対し、男性16~20人
1:1~1:15という割合は前国家段階の集団と一致している

p92-4

・暴力の積み重なりが、小さなクワや部族を破壊する

事例 ニューギニアの小集団 22人の男性が戦い始めた 半月後6人が殺害 8人逃亡
生き残るため他の集団に身を寄せて合流

Papuan 1年以上継続した集落間の戦い 250人が殺害 成人男性がいなくなる

Blackfoot 族(北部平原) 19c初 成人男性 50%不足

この割合は近代国家の争いと同じがやや超える

p92-5

・完全な敵社会の撲滅は未開社会の戦争で知られていないわけでもない

長期に渡る戦いによって、部族・サブ部族が絶滅する例が世界のいくつかの地域で記録されている

一度に行う大虐殺と 繰り返される小規模な急襲

事例 ニューギニア Woriau Maring の場合 全滅が完遂された事例 かなり稀

急襲方法は敵のメンズハウスをこっそり取り囲み、火を放ち、出てきた人間を殺す

普通、1つのMaringのクワは同時に複数ある敵のメンズハウスを襲う十分な兵力がなく、2~3人殺すと、別の家から反撃に合うので退却しなければならない

Woriau の場合 複数のクワと同盟を組み、全ての家に攻撃を加えたため、1日で男は全滅した

生き残った人々は無防備で、散り散りになり、まとまった集団でいることをやめる

部族社会での社会の絶滅は全ての人間を殺すものではない

むしろ、集団の重要な人物を殺し、残りを勝者の社会や友好的な集団に組み込む

社会的な絶滅

p93-1

・無国家社会の戦争での高い死亡率は未開社会の戦争の特徴の結果である

戦いの普及・戦いに出撃する高い割合・頻繁に起こる少ない犠牲の蓄積・純然たる死線

大虐殺における大規模な殺人・成人男性を通常殺す・女性子供の残酷な取り扱い

典型的な部族メンバー(特に男性)は近代国家の市民より頻繁に刀で殺されている

p93-2

・ある人は今世紀、戦争が原因(飢餓や病気を含む)で死んだ人は1億人であると試算した

これらの死は人類社会が国を分けるために払った代償として捉えることもできる

しかし、このぞっとするような数値は全世界がもし、バンドや部族、首長制であったのなら、20倍以上の多くの数になる

典型的な部族社会は年0.5%の人口を失う

この数値を20世紀の人口に当てはめると、1900年代は20億以上になる

核の効果と同じくこうしたシナリオは空想上のものであるが、未開の戦争が致命的でないことはない

WOUNDS AND THEIR TREATMENT

p94-1

- ・致命傷にならない傷は未開社会の争いではどの程度受けるのか？

その値は近代国家の争いのものより高いのか低いのか？

未開社会のそうした数値はほとんどない

事例 ニューギニア ある Mae Enga 族の 40%の戦士が傷ついた
通常損耗率と見なされる(しかし、かなり高い割合)
受けた傷の大半は四肢で、致命傷ではない

Mohave Indian 通常戦闘での損耗率を 30%と想定している

対照的に平均的な内戦では 12~15%の損耗率

Gettysburg での英軍は 21%であり、連合軍の 30%が損耗した

1916 年 Somme の戦い 英国第 13 軍が初日に 40%損耗

- ・わずかな証拠であるが、部族社会での戦士は近代戦での兵士と同じくらい傷ついている

p94-2

- ・未開社会で戦う人の多くは傷つくが、近代社会の場合よりも死亡率は少ない

事例 Mae Enga 砲戦 1 人死亡 : 10~30 人負傷

近代戦での割合 Gettysburg 1 : 5

アトランタの戦い ワーテルローの戦い 1:3

Somme の戦い 1:2

Mae Enga で戦士が傷を受けるのは無毒のもので、滅多に死なない

首・胸・腹・股間の傷は慎重

p94-3

- ・もちろん、未開社会や古代の戦いでも稀に死ぬ

敵と近接し、致命的なショックを与える武器で戦う Mohave 族は、戦場での死を想定している
マケドニアとローマの戦い 負傷者と同じかそれ以上の死亡者を見積もっている

Mohave 族や古代エジプト人の戦い 衝撃武器の傷は毒を塗っていない投擲武器より死ぬ
毒を塗っていない投擲武器より砲弾・爆風・砲弾片の一撃の方が致命的な傷を受ける

高い致死率は現代の火薬と古代の衝撃武器を反映している

p95-1

- ・しかし、現代の火薬兵器がより殺傷率が高いのであれば、30~40%のどの程度の損耗率が高く、低い割合なのか？

近代戦において敵は、ねらい打ちされ、集中砲火を受けることを避けたがる

つまり、近代兵器の本当の殺傷力は分からない

1000 発の弾で 1 人を殺すということになる

p95-2

- ・未開社会の高い戦争による死亡率に関しては、貧粗な医療行為のために多くの人が傷がもとで死んでいるのではと考えることも出来る

19c フランス ナポレオン戦争 かなりの数の死傷者が出ている

医療行為に消毒法も麻酔もない

軍医は多くの出血している患者に対し、負傷した四肢は決まって切断し、消毒していない傷を洗浄していない器具で切り、消毒していない包帯で強く縛る

19c 初の医療行為は、ショックを与え、感染症を引き起こす

兵士に下痢薬を与えて回復させようとしていたが、大抵赤痢で効果がなかった

現代の医療的な立場から見れば、19c の軍の医療は無駄以上に悪く、害がある

p95-3

・対照的に未開社会の多くの治癒者は矢を抜くだけであるが、傷を洗い、回復力があると知っている植物の湿布を傷の上に貼る

・最近の薬学研究では 2000 以上の植物の 61% に抗生作用があり、それらの効果は 20c 以前の軍での医療行為よりは効果的である

・北アメリカの一般的なシャーマニズム的な治療は傷から血を吸い出す

矢に毒がついている場合は用心するが、効果的である

・19c の軍医がもっていた唯一の外科的な有効性は大動脈や大静脈からの大量出血を止めることであった

・一方、多くの先史時代のまた首長制社会では、頭蓋の骨折を直すものとして頭蓋に穴を開けている

西洋では 19c の終わりまで拾得することが出来なかった技術

複数の治癒痕が発掘資料に確認でき、高い確率で手術は成功していた

・シャーマニズム的な治療は最悪でも無害で、良ければ効果的である

p96-1

・19c の軍医の患者はその軍医の能力を恐れていたという証拠もある

内戦で傷ついた兵士 軍医の荒治療がいやで傷を隠していた

致命的な傷のものは選択肢がなかった

1876 年 Cheyenne 族 足がバラバラになっていたが、軍医は命を助けるため足を切断

助かったことを、ある人はまぐれというかもしれない

・しかし、制度化された外科手術や体にきく薬草は多くの人を助けた

p96-2

・近代国家の兵士はまず初めに救助されるまで長い時間待たなければならない

事例 ワテルロ-の戦いの後 負傷した英軍は翌朝まで放置 仏軍は 2 日間放置

・未開社会の戦士は負傷後すぐに治療される

部族の戦士は負傷した仲間を助けるためにいろいろする(危険地帯から動かす)

事例 ニューギニア 戦場のすぐ後方にいる年寄りの男女は治療が出来る

北アメリカ シャーマンは呪文で手当をするため、戦いに参加する

・治療を受ける戦士は未開社会では家族や友人が世話をしてくれるが、近代社会では人間味のない軍の病院で公平な看護を受ける

前者が集中的な看護であり、精神的にも良い

p97-1

・部族社会で受ける治療は悪くなく、今世紀までの近代社会での兵士が受ける治療よりむしろ良い

・未開社会での高い死亡率はそうした空想上のやや劣る医療行為によって説明されること

はありそうにない